

Title	利瑪竇と明末の思想界
Sub Title	
Author	小柳, 司氣太(Oyanagi, Shigeta)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1933
Jtitle	哲學 No.11 (1933. 9) ,p.47- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000011-0142">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000011-0142</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 利瑪竇と明末の思想界

小柳司氣太

支那に於ける儒佛道三教の關係は、後漢の末年から現はれ、其の文獻として、弘明集廣弘明集以下多數の書物あり、又近時此等の材料に本づきて著はされたる良書例すれば常盤博士の「支那佛教と儒教佛教との關係」久保田量遠氏の「支那儒道佛三教史論」續出し、此外坊間流布の冊子も、此に論及する者少からず。然れども獨り耶蘇教が支那の思想上、如何なる影響を與へたるかといふことに關しては、これまで邦人の著述又は坊間の支那哲學史、支那思想史などに、あまり論評せられないやうである。固より史學の方面からは、耶蘇教のみならず、祆教摩尼教回教等、すべて唐代から支那に輸入せられた宗教に就いては、近時日支及び西洋の諸學者、それ／＼精密なる研究を發表したるも、其の多くは輸入の史的徑路、若くはそが支那當時の

風俗飲食などすべて具體的に見はれた文化との關係に止まりて、精神的方面、即支那の思想に如何なる影響を與へたるかといふことに就いては、格別の記述なきやに感ず、そは此等の史料が存在せず、換言すれば當時に於ける支那の學者は、是等外教と接觸することなく、隨つて文献に其の痕跡を留めざりしものか、或は元來此に關する事實ありしも隱晦に歸したるものか、その何れにもせよ、現代では景教即唐時の耶蘇教以下の諸宗と、支那哲學との關係は、今なほ暗雲の裡に隱蔽されてゐる事は Latowrette 氏の所說の如し [A history of christian mission in China p. 55]

但し同氏も、Timothy Richard 出及び佐伯好郎氏の所說により、景教が、金丹教 chin-tan chiao の創立者と同一である、又非常に兩教の間に類似點あることをいふ、前者の著述は未見なるが、佐伯氏は、金丹教を以て、呂祖即呂嵒(呂洞賓)の名を冒す道教の通名にあらざるかとの疑問を呈出されてゐる、そは同氏の有名なる Nestorian Monument in china 及び近刊の東方學報〔京研究所第三號東〕に發表された論文である、これによれば景教碑の呂秀巖は呂嵒と同一人であらうといふ。呂祖全書中には金丹に關することは多きも、其の教を直に名づけて金丹教といふ成語で現すことは、何時頃から始まつ

たものか、又呂品即洞賓の年代も、甚だ漠然たるもので、呂秀巖と同一人なることを  
断するには困難である。然しながら此は甚だ興味ある問題と謂はねばならぬ。

なほ Couling's Encyclopedea Sinica p. 273 Kintan Chiao を見よ。

また王闡運が張横渠〔一〇二七〕の西銘又正蒙に見なれた倫理的思想、即ち人は  
天地を以て父母となすべしといふことを指摘し、此は耶蘇教の經典に本づいた者  
であるとなしたるも〔國學扶輪社出版。王毛〕容易に信すべからざる説である。

然しながら元代以後に至りては、外來宗教が思想方面のみに止らず、文學方面に  
も關係を及ぼしたる事實につき、其を證すべき文獻も決して少くない。自分が此に  
記述せんとすることは、其の中につき特に明末に於ける耶蘇教に關することであ  
る。

前述の如く、耶蘇教は唐代に於て景教と稱せられ、一時は盛大を極めたること、か  
の有名な景淨の碑文にも明かなことなるが、其の後中絶し、更に明末に至りて聖方  
濟各、沙勿略 St. Francisco de xavier が布教の目的を以て、世宗の嘉靖廿八年〔一五二九〕本邦  
鹿兒島に來り、それより更に支那の布教を計畫し、廣東の上川島に上陸したれども、

熱病に冒され四十六才を以て歿す〔一五〕此の志を紹ぎたる者は即ち利瑪竇(Matthew Ricci)である。彼は沙氏の歿年の十月六日「イタリー」國の Ancona に近い Macerata に生れ、少年の頃より耶穌教に志し、明の神宗萬曆九年〔一五八一〕廣東の香山埠に到る。

同二十八年、教士龐順陽〔即龐迪我にして原名 Dedacus de pantaja〕とともに始めて、神宗に拜謁し、方物を貢獻し、且つ旨に應じて西教の要旨を奏上す。神宗之を嘉納して、居を帝都の内に賜ふ。利氏の初め支那に來るや、先づ支那語を練習し、遂に經史に精通し、當時の名公鉏卿、また學者と相往來し、議論を闘はすに至る。萬曆卅八年四月〔一六〇〇〕病んで歿す。壽六十九、支那に居ること廿九年なり。特に葬地を郊外に賜ふ。其の墓は、現に北京の阜城門外に在り〔利氏の傳は明史卷三二六意太利 艾儒略撰利氏傳による〕自分は、一昨年特に此地を訪ひ之を撮影す。同所には利氏以後の宣教師の墳墓多く、其數殆んど七八十の多さに及ぶ。初めは皆な獨立したる兆域を有し、龜趺石欄などの裝飾ありし者ならむも、義和團匪事件の時、大部分は破壊せらる。亂後其の碑文の部分だけを收拾して、之を會堂の壁にはめこむ。自分は、全部之を手拓する計畫で、技術家と同行したれども、滿洲事件勃發のため、之を中止した。

崇禎八年即利氏歿後廿八年に著はされたる劉侗の帝京景物略〔西城〕に曰く

萬曆辛巳。歐羅巴利瑪竇。入中國始到肇慶。劉司憲某。待以賓禮。持其貢表。達闈庭所貢耶蘇像。萬國圖。自鳴鍾。鐵絲琴等。上啓視嘉嘆。命馮宗伯琦叩所學。惟嚴事天主。謹事國法。勤事器算耳。瑪竇紫鬚碧眼。面色如朝華。既入中國。襲衣冠。譯語言。躬揖拜。皆習。越庚戌瑪竇卒。詔以陪臣禮葬。阜成門外二里。嘉興觀之右。其坎封也。異中國封下方而上圓。方若臺圯。圓如斷木。後虛堂六角。所供縱橫十文字。後垣不彫篆而旋紋。脊紋。螭之岐其尾。肩紋。蝶之矯其鬚。旁紋。象之卷其鼻也。垣之四隅石也。杵若塔若焉。祔左而葬者其友鄧玉函。函善其國醫。言其國。劑草木。不以質咀。而蒸取其露。所論治及人精微。每嘗中國草根。測知葉形花色。莖實香味。將遍嘗而露取之。以驗成書。未成也。卒于崇禎三年四月二日。按西賓之學也。遠二氏近儒。中國稱之曰西儒。嘗得見其徒。而審說之。大要近墨爾尊天。謂無鬼神也。非命。無機祥也。稱天主而父傳教者也。器械精。攻守悉也。墨也。墨迺近禹。今其徒畧以識日。日以識務。畫分不足。夜分取之。古之人愛日惜寸分。其然歟。墓前堂二重。祀其國之聖賢。堂前畧石有銘焉。曰美日寸影。勿爾

空過所見萬品。與時併流。

景陵譚元春過利西泰墓。來從絕域老長安。分得城西土一棺。研地呼天心自苦。  
挾山超海事非難。私將禮樂攻人短。別有聰明用物殘。行盡松楸中國大。不教奇骨任荒寒。

自分の此の論文は、耶蘇教また利子等の東來の経過を記するを目的となすに非  
ず、蓋し此等の事狀はすでに多く世に知られたれば、之を省略することゝなして、單  
に利氏と儒教佛教との思想的關係を述べやうと思ふ。然しながら、之に先だちて、  
其の文献を紹介せねばならぬ。

利氏を首として、當時來航の耶蘇教會士は、先づ布教の必要上、第一に支那語を修  
め、漢文に習熟するを勉む、其後支那の士大夫と交際するに及び、其の教理を述ぶる  
や、また漢文を使用す。利氏の門人李之藻之を編纂して天學初函五十二卷となす、  
理器二編より成る。理編は天主教に關し、器編は天文學數術等の科學を收む。四  
庫全書總目卷一三四〔離家類存〕によりて、其の書目を掲げむ。

理編すべて九種、左の如し

(一) 西學凡一卷、艾儒略字思及 Jules Aleni 著。天啓三年楊廷筠の序文、許胥臣〔著述は  
四庫提要卷一四に禹貢廣覽三卷。〕「許氏の著述は  
一〇七に蓋載圖說一卷を著錄す。」熊士旂の識語あり、附錄として景教碑文及び天啓五年李太僕即李之藻(號涼庵)の讀景教碑書後を載す。

(二) 崎人十論二卷、利瑪竇述。汪汝淳較梓。萬曆卅六年李之藻の序及び跋。また重刻の序として周炳謨及び王家植の二文を載す。なほ王家植は冷石生の雅名もて演崎人十規といふ文を附載す。

(三) 交友論一卷、利氏著。萬曆十二年徐光啓の跋と、同廿七年瞿汝夔、及び二十九年馮應京〔馮氏の著述は四庫提要卷一六に六家詩名物疏五十四卷。卷六七に月令廣義廿五卷を載す。明史にその本傳あり。〕「用編二十八卷。卷六七に月令廣義廿五卷を載す。明史にその本傳あり。」の二序を載す。

(四) 二十五言一卷、利氏述。汪汝淳較梓。萬曆卅二年の自序、及び同卅五年李之藻、同廿九年馮應京の徐光啓跋文を載す。

(五) 天主實義二卷、利氏述。萬曆卅二年の自序、及び同卅五年李之藻、同廿九年馮應京の序を載す。

(六) 辨學遺牘一卷、利氏著。李之藻及び彌格子即楊廷筠の二跋を載す。

(七)七克七卷。龐迪我字順陽著。萬曆四十二年の自序及び楊廷筠、彭端吾二氏の序を載す。

(八)靈言蠡勺二卷。畢方濟字今梁。Franciscus Sambiasi。口授。徐光啓筆錄。天啓四年の自序を載す。

(九)職方外記五卷。艾儒略撰。天啓三年の自序を載す。

器編すべて十種

(一)泰西水法六卷。熊三拔字有綱。Sabbathianus de Utris 撰。徐光啓筆記。李之藻訂正。  
萬曆四十年鄭以偉、曹于汴、〔曹氏のことは明儒學案卷五四に見ゆ。四庫全書提要に共發編(雜家二)及び仰節堂集(別集二五)を錄す〕徐光啓、  
彭惟成四人の序を載す。

(二)幾何原本六卷 利氏述

(三)表度說一卷 熊三拔撰

(四)天問略一卷 陽瑪諾字演西 Emmanuel Diaz 著

(五)簡平儀說一卷 熊三拔撰

(六)同文算指十卷 利氏撰

(七)圓容較義一卷 同

(八)測量法義一卷 同

(九)測量異同一卷 同

(十)句股義一卷 同

以上の中、四庫全書に著錄せられたるもの理編に就いては西學凡、辨學遺牘、二十  
五言、交友論、七克、西學凡附太秦寺碑、靈言蠡勺〔以上卷一二五〕雜家存目二、職方外紀〔卷七一地理四〕の七種  
にして器編の十種は秦西水法を〔卷一〇〕其他をば盡く天文算法類〔一〇六〕に著錄す。  
なほ天學初函以外の者にして、同書に著錄せられたるもの左の如し。

(1) 乾坤體義二卷〔文○六天〕利氏撰

(11) 新法算書一百卷〔同上〕龍華民字精華撰 Nicholas Longobardi 義王 圖字涵璣 Jannes Ter-  
renz 羅雅谷字味韶 Jacobus Rho 湯若望字道未 Johann Adam Schall Von Köln の四  
人及び李之藻李天經との合著

(111) 坤輿圖說〔卷七一地理四〕別本坤輿外記〔卷七五理存七地〕南懷仁字敦伯一字勳卿 Ferdinand Ver-

bieszt 著

(四)空際格致二卷〔一二五雜家存目二〕高一志原名王豐肅字則聖 Alphores Vagnoni 撰

(五)寰有證六卷〔同上〕傳訊際字體齋 F. Furtado 撰

以上傳訊際の外は皆明史の意太利亞傳に見ゆ。

さて天學初函は現今すでに稀観本で容易に入手しがたい。靜嘉堂文庫の外に東洋文庫にも二種を藏す。第一種は理編九種を完全に收む、第二種は西學凡より辨學遺牘までの六種、即ち第一種と同一のもの、及び泰西水法六卷、圓容較義一卷、測量法義一卷、勾股義一卷の三種を收めて、幾何原本、表度說、天問略、簡平儀注、同文算指なし。然れども此の五種は、單行本乃至叢書の一部として存在す、但し自分の此論は、器編に關する者に非ずして、理編のみ〔但し職方外滅は除く〕天學初函其物は前述の如く得がたきも、近時其の中のある者を複刻したる者あり、又往々單行本なきに非ず、一昨年北京在留中に入手したる者左の如し。

天主實義二卷〔一八六八年「清朝穆宗同治七年」慈母堂藏版、主教趙方濟准

辨學遺牘一卷〔一九一五年「大正四年」重刊。大公報主任英欽之の序跋、及び陳垣氏の序あり、且つ附錄として、艾儒略の利氏行蹟及び陳氏の李之藻傳を加ふ、自分の所藏は此寫本である〕

七克七卷〔一七九八年「清嘉慶三」  
年主教湯亞立山准〕

靈言鑑勻一卷〔一九二一〕

其他天學初函以外の者にして重刊せられたる書物、艾儒略の萬物真原一卷、言行記略一卷、陽瑪諾の天主聖教十誠直詮十卷、湯若望の主制群徵一卷、利類恩アリクン〔L. Bugis〕の超性學要三十二卷、傳訊際の名理探五卷をも入手す。なほ張星烺氏著の中西交通史料滙篇第二冊第一五九節明末來華外國教士傳には、多數の宣教師の姓名鄉貫生沒の大要及び著述目錄を載せ又 Wylie の Notes on Chinese literature p. 172—181 には更に降つて清朝道光年間に至るまでを以てす。然しながら此等書目の大部分の多くは亡佚したる者ならん。

さて自分が茲に紹介せんとするは、天學初函中の理篇なるが、自分は元來天主教の教理に聞く、また其の哲學的背景たる「アリストテレス」の思想にも通せず、且つ其の原語の音譯術語は、何れも現代の用語と大に異なるため、敍述の際、隔靴搔癢の憾なき能はざるもの、そは後日の研究に譲ることとする。

此書は西學記<sup>西洋學術概論</sup>とよいふぐる者である。其所説によるに西學の分類左の如し。

(一) 動鐸理加 Rhetoric の音譯 文科

(二) 費祿所費亞 Philosophy の音譯 理科

(三) 默第濟納 Medecine の音譯 醫科

(四) 動義斯 ? 法科

(五) 加諾搦斯 Canon ? 教科

(六) 足祿日亞 Theology の音譯 道科

更に費祿所費亞を分ちて

(1) 落日伽 Logic の音譯

(2) 費西加 Physic の音譯

(3) 默達費西加 Metaphysic の音譯

(4) 馬得馬第加 Mathematic の音譯

(5) 厄第加 Ethics の音譯

の五種となす讀者は之によつて學術の分類及び現今の Philosophy と此とは如何に異なるかを知るに足らん。四庫全書提要卷一二五雜家存目二に概評して曰く、其教授。各有次第大抵從文入理。而理爲之綱。文科如中國之小學。理科則如中國之大學。醫科法科教科者。皆其事業。道科則在彼法中所謂盡性致命之極也。其致力亦以格物窮理爲本。以明體達用爲功。與儒學次序略似。特所格之物。皆器數之末。而所究之理。又支離神怪。而不可詰。是所以爲異學耳。

(二) 天主實義二卷。利氏撰

此書は天主の全智全能にして絶對至尊なることを左の八條に論す。(一)天主始制天地萬物而主宰安養之。(二)解釋世人錯認天主。(三)論人魂不滅大異禽獸。(三)辨釋鬼神及人魂異論天下萬物不可之一體。(五)排辯輪廻。(六)戒殺生之謬而明齋素之意在於正志。(七)解釋意不可滅。並論死後必有天堂地獄之賞罰。(八)論人性本善併

述天主門士之學、且つ一面には儒教經典の天又は上帝は天主と同一なることを證じ、一面には老氏の虛無を排し、特に佛教の誕妄にして、其の輪廻説は閉地臥刺 Pythagoras の説を剽窃したるに過ぎず、唯だ後世の儒者が古意を解せず、往々此の天又上帝を解して、理又は太極となしながら、佛老二氏を排斥するは所謂以燕伐燕の類なることを論す。されば利氏の所説は、平田篤胤の鬼神新論と同工異曲の者といふべし。平田翁の所説によれば、天又上帝は畢竟我皇祖天神の古傳説にして、之を解して理となすは宋學の謬見である。

さて利氏が布教の必要上、詩書の天又上帝と天主とを同一と認めたることから、其後の宣教師は皆な之を主張し、また孔子の祭典、祖先の法事等をも之を默認したわけである。然るに其後「ドミニカン」派の宣教師の支那に来るや、端なくも茲に「セシュイット」派即利氏一派と見解を異にして、遂に其の審判を羅馬法皇に仰ぐこととなり、大約百年間の論争となつた。此事の詳細なることは桑原博士の「新に發見されたカトリック教の宗論關係の二史料〔大正十五年七月號史林〕支那の孝道〔狩野教授選著記念論集〕齋藤教授の明末清初の耶蘇教〔史學雜誌〕及び Couling 氏 Encyclopædia Sinica. p. 485 Rites con-

troversy に詳説せらる。

### (三) 崎人十篇。利氏撰

此書は利氏が十條の意見を記したる者で、崎人は利氏自己をいふ。恐くは莊子太宗師篇の崎人者崎於人而侔於天に取つた者で、十條の所説が俗論に反するからかく名づけた者であらう。十條は次の如し (一)人壽既過誤猶爲有。(二)人於今世惟僑寓耳。(三)常念死候利行爲祥。(四)常念死候備死後審。(五)君子希言。而欲無言。(六)齋素正旨非由戒殺。(七)自省自責無爲爲尤。(八)善惡之報。在身之後。(九)妄詢未來自速身凶。(十)富而貧吝苦於貧窶。

なほ本書の附錄として、西琴曲義八章を載す。こは萬曆二十八年利氏が神宗に拜謁、西洋樂器を獻上せし時、命に應じ其の歌曲をも漢譯したものである。其の最初の歌は左の如し。

#### 吾願在上 一章

誰識人類之情邪。人也者乃反樹耳。樹之根本在地。而從土受養。其幹枝向天

竦。人之根本向乎天而自天承育。其幹枝垂下。君子之知。知上帝者。君子之學。學上帝者。因以擇誨下民也。上帝之心。惟多憐恤蒼生。少許霹靂傷人。常使日月照而無私方兮。常使雨雪降無私田兮。

(四) 二十五言一卷。利氏撰

此書は耶穌教旨に本づいたる道德を二十五ヶ條に分ち說いた者である。

(五) 辨學遺臘二卷。利氏撰

此書は利氏が佛教の輪廻說を排斥し、又儒教に就いて云々したことにつき〔述義の天主實の如し〕虞淳熙と利氏との往復書簡を收め、且つ利先生復蓮池大和尚竹窓天說四端の一文を加ふ。

虞淳熙の傳は浙江通志〔七八〕によるに、字長孺錢塘の人、萬曆十一年の進士、官途に就きしも、黨人の反對にあひ、郷里に隠居し、弟淳貞字僧孺とともに、奇書祕典を涉獵し、方術陰符を研究す。少にして李王に知られ、又湯顯祖、屠隆に心折す。其行文は、

奇字僻句を自由に使用す、徳園集六十卷を刻すといふ。四庫提要には其著述孝經集靈一卷〔卷一四四、小説家存目二。寶顕堂秘笈書集に此書の節略一卷を收む〕墳篋音二卷〔第淳貞同撰。卷一六三、總集存目三〕の二書を著錄するも、徳園集あるを言はず。遺牘の重刊者歛之も其書終末易求といふ。然るに幸に我内閣文庫に二部を藏す。先日其の一部を借覽するに、文集二十五卷詩集八卷、計三十三卷〔冊〕あり。中に畸人十篇序〔卷六〕天主實義殺生辨〔卷二十〕及び答利西泰書〔卷十四〕あり。勿卒寓目の際なれば、辨學遺牘中の虞德園詮部與利西泰書といふ者と、同一なるか否やを検すること能はず、文集には答利西泰とあり、遺牘には與利西泰とあれば別文なるかも知れず。且又内閣本は三十三卷にして、浙江通志所說の如く、六十卷ならず、故に今は只だ虞利兩氏の關係をば遺牘中に現存する往復手翰によりて徵せん。〔なほ列朝詩集丁、十五見よ〕

虞氏の要點は、先づ畸人十篇天主實義の自序を述べ、更に利氏が三聖人〔孔老氏〕の書を精讀せずして、徒らに之を批評し、特に佛教に對する駁論の誤まれるを指摘したる者である。利氏は之に答へて、先づ虞氏の序文を謝し、更に三教の中、儒教を可なりとするは、其の所謂天又上帝と天主と同一なるに由る、必しも中夏の人々に媚びて自

説の容れられんことを求むるに非す。其佛教を非とするは、空寂を尙びて、天主の存在を無視するに由るとなす。

次に利先生復蓮池大師大和尚竹窓天說四端は、雲棲の株宏と利氏との關係である。株宏は仁和の人、俗姓は沈氏、初め儒を學び嘉靖四十四年、二十七歳の時始めて佛に歸し、萬曆四十三年〔一五六〕七月四日示寂、世壽八十一、僧臘五十。其の著述は諸經疏の外、禪關策進、竹窓隨筆〔自一筆至三筆〕、雲棲法彙〔遺稿、房、雜錄〕、廣く世に行はる〔雲棲株宏蓮池禪師塔銘。及び新譜〕  
高僧傳卷四三

この遺稿卷二に株宏が虞德園に答ふるの書二通を載す、其一は遺牘所載の如し。其の要旨は利瑪竇回柬〔前に與へた返書〕の文章は巧妙で、天主實義、畸人十篇の如き拙文ではない、故に多分中夏の人士にして、天主教を信する者の代作ならん、然しながら是を以て彼の邪説が、如何に士人を誘惑するかを知つて、まことに慨嘆にたへない」といふことである。

株宏は、更に竹窓三筆に於て天說三編及び天說餘を記し、天主教を批評す。其一は天主は忉利天王なり。其二は天主教が梵網經の殺生戒描非難に對する辯明。

第三は祭天尊天は、孔孟すでに之を言ふ、故に中國は天主教の必要なし。第四はト  
籠及び輪廻の信すべきこと。遺牘には利氏が以上の四點に對する辨駁を載す。

然るに陳垣氏の序文によれば、竹窓三筆は、萬曆四十三年の公刊〔一六〕なるも、利氏は  
すでに卅八年〔一〇〕に歿す、故に恐くは後の耶蘇教會士の作ならんといふ。更に天  
說餘に對する辨駁中に、七克を引く。此書は萬曆四十二年〔一四〕著者龐氏の序文あ  
れば、是れまた利氏沒後に係る、然らば陳氏の所說從ふべきに似たり。

なほ本書に彌格子即揚廷筠の跋あり、曰く

予視池沈僧天說、予甚憐之。不意未及數月、竟作長逝也。聞其臨終自悔云。我錯  
路矣。更誤人多矣。有是哉。此誠意所發。生平之肝膽畢露。毫不容疑也。今  
之君子。所以信奉高僧者。以其來生必生西方淨樂土也。西方錯路乎。彼既認  
爲非。高明者宜舍非以從是。否則不爲後日之蓮池乎。

即ち祿宏が臨終の際、始めて佛說の迷妄を悟り、天主教に歸依するに至るといふ、果  
して然るや否や。

## (六) 交友論一卷。利氏撰

利氏が南昌の建安王明史卷一〇二諸王表に  
よるに康懿王多節かの爲に、友道を論じたる者である。曰く朋友は第二の我である。曰く過譽の害は過訾の害よりも大なり。曰く朋友多きは寧ろ親友少きの證である。曰く有徳の人は友人も多く、不徳の人は之に反す。曰く貧富の問には友誼を結ぶべからずなどの類である。四庫提要に王肯堂の譜岡齋筆麈を引きて、此書爲肯堂所點竤矣といふ。筆麈卷三に曰く

利君遺我交友論一篇。有味哉其言之也。病懷爲之爽然。勝枚生七發遠矣。使其素熟于中土語言文字。當不止是。乃稍刪潤著于篇。

その卅七條を摘錄し、又利氏の近言と稱する著につき、近言一編。若淺近而其旨深遠矣と稱し、其十四條を摘載す。按するに王肯堂は江南通志卷一によるに字于泰、金壇の人王樵の子。萬曆十七年の進士、生平讀書を好み又書法に巧妙でいろいろの法帖を鈎欄する數十卷の多きに及ぶ。四庫提要には筆麈卷一二八の外、尙書要旨三十卷卷一四書存、論語義府二十卷卷三七書存、證治準繩百廿卷卷一〇四書字二の三書を載

す。此外に律例箋釋を著す。

(七) 七克七卷。龐廸我撰

此書の七克と稱する所以は、左の條目による。

- 一、謂謙讓以克驕傲。
- 二、謂捨財以克慳惜。
- 三、謂絕欲以克色迷。
- 四、謂含忍以克忿怒。
- 五、謂淡泊以克飲食迷。
- 六、謂仁愛人以克嫉妬。
- 七、謂欣勤于天主之事、以克懈惰于善。

著者以爲へらく、欲もと惡に非ず、然れども私欲は萬惡の根本にして、欲富、欲貴、欲逸樂の三大幹は之れより生じ、此の三大幹は前述の七枝を生む、之を除かんとせば、第一天主の降鑒を敬畏すること、第二凡百の行爲に於て不純の動機なきこと、第三

修徳の時には、其小なる者易き者より着手して、大なる者難き者に進むべし。

### (八) 靈言靈匱二卷畢。方濟撰

此書は亞尼瑪 Anima [譯言靈魂] の特質を(一)亞尼嗎之體(二)亞尼嗎之能(三)亞尼瑪之尊與天主相似(四)亞尼嗎所向至美好之情の四項目に分敍す。其自序に、奧吾斯丁 (Augustin の音譯)曰費祿蘇非亞 (Philosophy の音譯)總歸兩大端。其一論亞尼瑪。其一論陡斯 天主 (Deus の音譯)論亞尼瑪者、令人認已。論陡斯者、令人認其源云々。

此稿を終るに臨み、艾儒略撰利先生行蹟に就いて、聊か利氏に關係ある學者の事を列舉せん。

(一) 李之藻は前述の如く、天學初函の編纂者にして、字は振之一字我存、杭州仁和の人、萬曆廿三年の進士にして、歷官太僕寺少卿に至る。二十九年利氏が京に至るや、從遊して其の學說に傾服す。天主實義の著に與りて力あり、又兼ねて天文算數に及び、利氏と與に乾坤體義を譯す。三十八年大患に罹り、利氏の親切なる看護を蒙り遂に洗禮を受けて教名を良といひ、Li Leon 因りて涼庵居士と號す。利氏の歿す

るや、爲に其喪を經紀す。三十九年父を喪ひしどき郭居靜 L. Cattaneo [著者性靈] 金尼閣字四表 Nicholus Trigault [著者性靈] 儒耳目養二師を杭州に迎ふて、耶蘇教の葬式を行ふ。之藻の同鄉人楊廷筠字仲堅 [萬曆二十一年進士] も、また之藻に勧められて天主教に歸す。杭州は元來佛教の盛なりしところなれば、虞淳熙株宏和尚の疑難大に起る。前記の辨學遺牘を見よ。四十四年沈淮方從哲等教難の疑獄を構ひし時、之藻徐光啓等百方之を救解す [明史卷二一八沈方二氏の傳は]。天啓元年清兵瀋陽を攻陷し、京畿の守備急なるに及び、之藻は西洋の砲術を利用することを奏したれども、用ゐられずして、反へて光啓廷筠等とともに邪教の魁首と認めらる。既にして時事日に非なれば、之藻は郷里に閑居、自ら存園寄叟と稱す。天啓五年、長安の居民始めて太秦景教流行碑を發見す、之藻之を研究して、其の天主教たることを表章す。西學凡附錄の讀景教碑書後即是れなり。曰く其云三一妙身。即三位一體也。其云三分身。即費略降誕也。其云同人出代。云室女誕聖於太秦。即以天主性接人性。胎於如德亞國室女瑪利亞而生也。云々とまた傳訊際の來朝するや、力を合せて寰有詮、明理探の二書を翻譯す。崇禎三年十一月 [三〇六] 病を以て歿す [李之藻の傳は是れまで不明なりしも陳垣の研究によりて、今その大要を記すのみ] 四庫

提要には頌宮禮樂疏十卷〔卷八二〕新法算書〔卷一〇六〕渾蓋通憲圖說〔同〕圓容較義〔同〕文算指〔卷一〇七〕を收む。

(二) 徐光啓字子先、上海に生る、萬曆廿七年の進士にして、崇禎六年〔三六〕十月歿〔明史卷二五〕。四庫提要には、其著詩經六帖重訂十四卷〔詩存一七〕農政全書六十六卷〔農家〕新法算書〔天算一〇七〕測量法義〔同上〕を著錄す。利氏に從ふて李之藻と與に天文數學を受け、又龍華民、鄧玉函、羅雅谷等と與に天象の觀測に從事す。新法算書、測量法義はその結果である。然しながら農政全書は、最も善本にして、今日と雖も世に行はる。徐氏も亦李氏と同く、洗禮を受け、教名を Paul Hsü といふ。かの上海の徐家滙の教會は、實に徐氏の保護によりて成立したる者である。其女も(教名 Candida) また歿年七十三歳まで、熱心なる敬虔の信者であつた。

(三) 艾氏の傳によれば瞿太素は、瞿景淳の長子である。今明史卷二一六によるに、汝稷、汝說の二子あり、列朝詩集〔十五〕によるに、汝稷字元立、尤も佛教に通ず。大日本續藏經の指月錄三十卷は、其の論集である。太素は其の雅號ならん。又案するに交友論の序文に瞿汝夔といふ者あり暫く疑を存す。四庫提要に、瞿景淳の瞿文懿

公文集十六卷〔卷一七七〕汝稷の瞿問卿集十四卷〔別集存七〕を著錄す。汝說の長子式  
耜は明の亡ぶるや國に殉す〔明史卷二〕四庫提要には愧林漫錄十卷〔雜家存九〕を著錄す。

(四) 馮琦の傳は明史卷二一六。沈一貫の傳は、卷二一八。葉向高の傳は同二四〇  
に見ゆ。四庫提要によるに、馮琦には經濟類編一百卷〔類書二三六〕沈一貫には易學十  
二卷〔七卷易〕敬事草十九卷〔真議存五六〕弇州稿選十六卷〔別集存一七七〕經世宏詞十五卷〔卷一九  
存二〕吳越遊稿〔同上〕を著錄す。然しながら老子通二卷は有名なもので、廣く世に行はる。

葉向高には說類六十二卷〔雜家存九〕を著錄するも、其の最も世に知られたるは蒼霞  
草二十卷といふ文集である。最後に記すべきことは李卓吾との關係である。陳  
氏の傳に、溫陵卓吾李公在南都遇訪利子諸論間因識天學爲眞。賦詩爲贈と李卓吾  
の事については「高瀬博士還曆記念支那學論叢」に於ける「明末の三教關係」といふ拙論に、其一端  
を記載したるが、更に李氏文集を繙けば、實に左の詩を錄す。

逍遙下北去。迤邐向南征。刹利標名姓。仙山紀水程。回頭十萬里。舉目九重城。  
觀國之光未。中天日正明利西泰賜。

かの拙論に論じたる如く、明代の陽明學派は、王心齊七年没、王龍溪五年没以来、ますく極端なる心學となりて、禪學と擇ぶなく、又佛教の紫柏尊者真可三年没、蓮池大師株宏六年没、慈山大師德清六年没、藕益大師智旭五年没相尋ぎて、三教融通の法鼓を鳴らす。林兆恩八年没、焦竑〇年没また此の時代の人である。而して李卓吾は紫柏尊者の親友で、また心學の鉅子である。もし彼をして、其の思想を圓熟せしめなば、或は三教合一より、更に一步を進めて四教同致の竿頭に排宕奇矯な文字の大旆を翻へしたかも知れぬ昭和八年五月十日  
起稿六月二日

補(1) 李氏續焚書卷一、與友人書曰、

承公問及利西泰。西泰大西域人也。到中國十萬餘里。初航至南天竺。始知有佛。已走四萬餘里矣。及抵廣州南海。然後知我大明國土。先有堯舜。後有周孔。住南海肇慶。幾二十載。凡我國書籍無不讀。請先輩與訂音釋。請明於四書性理者。解其大義。又請明于六經疏義者。通其解說。今盡能言我此間之言。作此間之文字。行此間之儀禮。是一極標致人也。中極珍瓏。外極樸實。數十人群聚喧雜讐對各得。傍不得以其間鬪之使亂。我所見人。未有其比。非過亢則過諧。非露聰明則太悶悶曠曠。

者。皆讓之矣。但不知到此何爲。我已經三度相會。畢竟不知到此何幹也。意其欲以所學易我周孔之學。則太愚。恐非是爾。

補(2)陳田編輯明詩記事庚籤卷廿一に徐光啓の詩一首を載す。詞句巧妙ならざるもの。珍らしいものなれば、左に錄す。

### 題陶士行運甓圖

典午朝臣鮮尙實。競以曠達相矜誇。娓娓玄談未終席。紛々胡騎亂如麻。白玉  
麈尾香金埒。甕間酒龍聲噭噭。誰使神州陸沈者。空復新亭淚成血。於時獨有  
陶荊州。卓爾不逐頽波流。高齋晝夜百瓴甃。勞身苦骨時矻矻。心知鳩毒是懷安。  
肉緩筋驚成何益。誰爲點染圖中史。炯炯神明薄毫楮。披圖再四忽自喜。瘦骨棱棱  
髮上指。

補(3)最近楊廷筠の著「代疑編」といふ書一冊を入手す。附錄に丁志麟の作にかかる  
楊氏事蹟を載す。